百合子賞　佳作　受賞作品

陽だまり

郡山ザベリオ学園中学校

〔拝啓〕

日に日に暑さが増していますが、元気にしていますか。

この時期になると、いつもあなたを思い出します。あなたは今もきっと、開いた本の中で、旅をしているのでしょう。

あなたには今、どんな世界が見えていますか。

【春風】

中学校生活一日目。初めて足を踏み入れる校舎には、既に人だかりができていた。「同じクラスだ！嬉しー！」とか、「クラスは違ってもずっと友達だからね」とか。皆同じ貼り紙に軽々しく感情を動かされていく。指示されるわけでもなく、私も自分からその波に飲まれる。

私の通っていた小学校からこの中学校に入学するのは十人だから、六クラスもあるこの学校で、友達と一緒になることはまずないだろう。適当に名前を目でなぞる。あった。一年一組流川すみれ。私の名前の周りには、やっぱり友達はいなかった。

張り紙から目を離そうとしたその一瞬、自分の名前のすぐ下、中性的でありながら陽だまりのようなその名前に、見覚えがあった。一年一組呂井優希。小学校の同級生だった。友達では、ない。彼女との関係は、挨拶を少し交わす程の、知り合いみたいなものだと思う。

でも、私はどこかで安心していた。よかった、私は一人ぼっちじゃない。彼女と話していれば、少なくとも人見知りの可哀想な人には見えないだろう。

私は眩し過ぎるほど鮮やかな『入学おめでとう』の文字を横目に、教室へ向かった。

教室の中から漏れる賑やかな空気に少し気後れしながら、私はドアを開けた。黒板に貼られた座席表を見て、自分の席を探す。窓際の、前から三番目の席だった。

自分の席に目をやると、そのすぐ後ろで、呂井優希はがやがやとした喧騒の中、一人本を開いていた。窓から、春の風が吹き込む。セーラー服の赤いスカーフの下で、彼女は小さな手元から違う世界を旅していた。

私は邪魔にならないよう、静かに鞄を置いて、彼女の前の席に着く。少し迷ってから、後ろの席を振り返って声をかけた。

「おはよう。優希ちゃん、だよね。」

「うん。おはよう、すみれちゃん。」

彼女はふんわりとした笑顔で、私の次の言葉を待つ。あまり話したことがなかったからだろうか。その優しい笑顔を、初めて見た。

「何の本読んでるの。」

そう聞くと、彼女は慣れた様子で本に栞を差し込み、その表紙を見せてくれた。

「これ。表紙に惹かれて買ったんだ。」

「面白い？」

「えっと、まだ序盤だから分からない。」

彼女の太陽のような微笑みが、心にすんなり馴染んでゆく。

「優希ちゃんは本、好きなの？」
「大好き。新しい世界に行けるから。」
彼女は手を本の上ですっと滑らせた後、真っ直ぐに私を見た。長いまつ毛の奥に、澄んだ瞳が見える。
彼女のその言葉はすごくキラキラしていて、少し、羨ましかった。
「そっか。」
「あの、もしよかったら、この本読み終わったら貸してあげるよ。」
ありがとう、と言いそうになって、読書に疎い自分を思い出す。借りても、結局読まずに終わってしまうかもしれない。数秒迷った後、先生が教室に入ってきたのと同時に、曖昧な返事をしてしまった。
【快晴】
あの曖昧な返事を、彼女はイエスと受け取ったのか、もしくはどうしてもその本を私に読ませたかったのか。三日後、私の手の中には、彼女が読んでいたあの本があった。
彼女が惹かれたと言った、その本の表紙の絵は、とてもよく彼女に似合っていた。広い草原の中、一輪だけタンポポが咲いている。そのタンポポは、温かく穏やかな光を、自ら発していた。
家に帰ってすぐ、私はベッドに座り、迷うことなくその本を鞄から取り出す。彼女への興味と美しい表紙の感動は、読書に対する抵抗をも、飛び越えていた。久々に触れる本は、所々でわからない言葉があったり、読むスピードが気持ちに追いつかなかったり。本から距離を置いていた頃の自分に苛立ちを覚えながらも、次第に物語に引き込まれていった。
私の読書は時間がかかっても、彼女と親しくなるのにはそう時間はかからなかった。
彼女はいわゆる本の虫なのだと思っていたけれど、普通の女の子みたいに、音楽も聞いていたし、テレビも見る。だから、初めは休み時間に好きな歌手の話や、テレビの話をして、すぐに打ち解けられた。
それからは移動時間や休み時間、彼女と一緒に、いろんな話をした。
初めて呼び捨てで呼び合った時は、なんだか夢みたいで、心がふわふわしていた。
彼女と時間を共有するほど、彼女といることが、自分の一番の時間になっていった。
私は今まで、彼女のような人に会ったことがなかったのだと思う。私は幼い頃から、人付き合いが得意な方ではなかった。友達と呼べる人は少しいたけれど、誰かと一緒にいて、多少疲れるのは当たり前なんだと思っていた。でも彼女は違った。自分の話をしていても、彼女の話を聞いていても、包まれるような温かさを感じた。
二週間後の朝、私は教室で彼女の姿を見つけた瞬間、一直線にその席に向かった。昂る気持ちを抑えながら話しかける。
「おはよう。あのさ、本、ありがとう。読んだよ。」
「お、おはよう。もう、びっくりしちゃったよ。で、どうだった？」
彼女の微笑みに私は勢いだけで答える。
「最後、泣けた。主人公がさ、手紙を書いてるシーン。すごく切なかった。」
「すみれも？最後のあれは、ほんと切ないよね。でも、私もそこが一番印象的だった。本のことでもすみれと気が合うかも。」
私たちは、好きな場面や感動したことを夢中になって話した。それから彼女は、机の中から一冊の本を取り出す。
「すみれなら、きっとこの本も気に入ってくれると思う。」
こうして、本の貸し借りをして、感想を話して盛り上がる。これも私たちのコミニュケーションの一つになっていった。読んだ本が増えてい

くたび、彼女との会話も、笑顔の瞬間も増えていく。

彼女と出会ってから、家に帰ったら彼女との出来事を必ず母に話すようになっていた。夕飯の時間、私の話を、母はいつも笑顔で聞いてくれる。

「見て。今日は優希から、この本借りたんだ。厚くてびっくりしたけど、読み始めたらあっという間だって。」

母はふふっと笑って、目を細める。

「すみれさ、中学校に入って、優希ちゃんと出会ってから、なんか楽しそう。」

「うん。すっごく楽しいよ。」

母と話すと、改めて思う。彼女との時間は、波にゆらゆらと揺れるあの光みたいに、誰にも渡したくないくらい、輝いていた。

人生で初めて、知り合いでも、友達でもない、『親友』を見つけられた、そう思った。ずっと彼女といたかったし、ずっと一緒にいれると思っていた。

【梅雨前線】

始まりの季節が過ぎ、緑の季節も過ぎて、また新しい季節がやってきた。

灰色の雲が空を覆い、何となくぼやけた空気が教室を満たす頃、彼女はぱったりと学校に来なくなった。

理由は悪口らしい。学級委員の女子が、好奇の影を含んだ、心配そうな顔で教えてくれた。

初めはそのうち来るだろうと思っていた。けれど、一日が三日に、三日が一週間に、彼女が来ない日が、どんどん長くなる。私たちのお気に入りの本が増えていくはずだった彼女の机の中は、課題やプリントで埋め尽くされていった。

この日は、いつもよりも早く、自分に日直の仕事が回ってきた。何気なく、学級日誌をパラパラとめくると、欠席者の欄に目が留まった。優希さん、呂井優希さん、優希さん・・・。

みんなが彼女の名前をその欄に書く姿が、頭に浮かぶ。優希がいないということが、みんなの日常に、そして私の日常にまで染まっていく気がして、すごく、怖かった。

その日の放課後、図書室で本を漁った。自分の中の優希の存在を、確かめたかった。

彼女と同じように、綺麗な表紙の本やおすすめになっている本を借りた。家に帰ってその本を開き、ひたすらに文字を追った。けれど、黒いもやもやが邪魔して、全く頭に入ってこない。もうどうしようもなくて、イヤホンを耳にねじ込んで目を瞑った。

【陰り】

それから二ヶ月間、私の後ろの席は一度も埋まることなく、夏休みを迎えようとしている。本の交換をすることも、彼女と話すことも、彼女の姿を見ることさえできなかった。

それは私にとって、空白のページだった。

終業式の朝は雨だった。もう三日間近く雨が降り続いているのに、九州では梅雨が開けたらしい。こっちも、そろそろだろうか。

ガヤガヤとした教室は、夏休みへの期待で、明るい色をしていた。その中で一つだけぽつりと、空っぽで、透明な席がある。

今日も来ないのかな。

これも、日本中が同じ天気ではないように、自然なことなのだろうか。いつかは、晴れる日が来るものだろうか。

午前中のみの特別時程はあっという間に終わって、みんなが教室から

出ていくとき、私は先生に声をかけられた。
「流川さん、少し手伝ってくれない？」
それは、優希が職員室に来ているから、学校のお便りをまとめて彼女に渡してほしい、ということだった。
私は、彼女に会えることが、嬉しくてたまらなかった。分厚いプリントの束を封筒に入れるときも、職員室に向かう暗い廊下でも、優希に何を話そうかと考えた。黒いもやもやも、もう消えるのだと思った。

職員室に着いて、小窓を覗くと、彼女は先生と話をしていた。久しぶりの彼女の姿に、ふっと心が緩んだ。
そのまま扉を開くと、彼女は私に気づき、微笑みながら小さく手を振ってくれた。私は手をふり返した後すぐに、彼女の元へ向かった。初めて本を彼女に返したときみたいに、浮ついた声で話しかけた。
「久しぶり。元気にしてた？」
少しの間の後で、彼女はいつも通りの調子で返してくれた。
「うん、元気だよ。」
そう言った彼女の微笑みに、少し影が差しているように見えた。本当にそうだ、とは言えないけれど、わかる。彼女の顔は、ほんのり憂いを帯びていた。
その途端、私はどうしようもなく怖くなった。どんな言葉をかけても彼女を傷つけてしまう。そんな気がして、頭の中で必死になって言葉を探していた。
「うん、よかった。」
結局私は、これ以上何も言えなかった。
【土砂降り】
家に入る前に傘を振り、水滴を落とした。ずっと続いている雨は、私が学校を一人出る頃には、その勢いを強めていた。

ローファーを脱ぎ、足がフローリングに触れると、ひんやりと冷たかった。形だけの小さな玄関を出て、ダイニングを横切り、自室に繋がる階段を上る。すると私に気づいた母が、おかえり、と言った。
「ものすごい雨だねぇ、お迎え行けなくてごめんね。」
「ううん、大丈夫。」
「よかった。寒いだろうから、何かあったかいもの飲む？」
「ごめん、今日はいらない。」
部屋に入って、電気もつけないまま、鞄と自分の体をベッドに放り投げる。まだ昼なのに、黒い雲のせいで夕方のような暗さだった。
天井をじっと眺めていると、彼女の顔が頭をかすめる。陽だまりに陰りが差していた、あの瞳を、初めて見た。私はどんな表情で、どんな言葉をかけるべきだったのだろう。鼻の奥が、つん、と熱くなる。ふと、冷たく湿った制服に、雨の匂いがした。

「優希ちゃん、今日は学校来たの？」
部屋着を取りに行こうとして一階に下りたとき、母が言った。
彼女のことはほとんど話していたから、母も彼女が学校を休んでいることを知っていた。彼女のことも、私のことも心配してくれた。でもそれが少し、重荷だった。
自分が、今どんな顔をしているのかわからなくて、母に背を向けたまま答える。
「来なかった。」
「そっか、まあしょうがない。二学期は来てくれるといいね。」
私は嘘をついた。
彼女は学校に来た。それから彼女と会うことまでできたのに。それなのに。大切な親友に言葉をかけられない自分。親友に、向き合えない自分。私は最低だ。本当に最低だ。

体の奥から、熱いものがせり上げてきて、喉が苦しくなる。
立ち止まった私に、母が気づく。
「どうしたの。すみれは気にすることないよ。大丈夫だから。」
何も知らない母の優しさが、自分を責めた。限界だった。
「何が大丈夫なの！何が気にしないなの！あんたなんか何も分かってないのに。ほんと、なんにも分かってない。」
熱いものが体中を駆け巡って、目から漏れた。こぼれた熱さが、頬を濡らす。
逃げたい。その場からか、母からか、はたまた自分からか。正体の分からない何かから逃げたくて、土砂降りの中、外へ飛び出した。雨だろうとなんだろうと、私には関係なかった。
家に立てかけてあった自転車に乗って、雨へと漕ぎ出した。
冷たく濡れたスカートが、シャツが、肌にじっとりと張り付く。吹き付ける風が、耳をごうごうと鳴らしていく。降りかかった雨が、顔の熱を解かす。目から溢れ出す熱い涙と、降りかかる雨とがぐにゃりと混ざり合う。結っていた髪が解け、水滴がしたたる。
それでも力任せに足を動かした。どこへ向かっているのかも分からない。冷え切った体の内側で、熱いものがうずまいて、体を支配する。漕いで、漕いで、無心に漕ぎ続けた。

【夕虹】

自転車を降り、ぼやけた視界に映ったのは、中学校のグラウンドだった。もっと遠くに来ている気がしていたのに。坂を上ったところにある校舎が、雨で霞んで見える。錆び始めているフェンスに沿って、自転車を押した。体の中の熱さは冷めても、雨は降り止まない。黒いアスファルトにも、自分にも、等しく雨が降りかかっている。
坂の途中で、顔をあげる。グラウンドに直接繋がる南口の校門は、ほんの少し開いていた。まだ鍵はかけていないのだろうか。触れてみると、雨粒で冷たかった。そっと押すと、きぃ、と音がして、一人だけの私を出迎える。自転車をそのわきに駐め、だだっ広いグラウンドを歩いた。真っ直ぐに引かれた白線が、強い雨で滲んでいる。
そこから見えた校舎に、ちらほらと明かりがついていた。人の気配が、久々に感じられる。視線を落とし、職員玄関を見ると、傘をさした、二つの人影が見えた。先生と生徒だろうか。何か話している様子だった。見つからないよう、足を止める。その瞬間、何か思い出したように、耳に雨の音が戻った。全身を打つ雨の冷たさが、しみる。

やがて二つの影がお互いに頭を下げて、別れた。一つは校舎に入っていき、もう一つの影は、正門の方へ歩き出した。
その人影が、はっとしたようにこちらを振り向く。その意識が自分に向けられたものだと気づくのに、数秒かかった。人影が、傘を持ったまま、こちらに向かって走り出す。グラウンドと校舎をつなぐ階段を、急いで降りてくる。それなのに、私は呆然と、ただただ立ち尽くしていた。
「すみれ！」
叫んだのは、優希だった。
その声で、自分の体温が戻る。
何度も、何度も聞いた、あの声だった。私がずっと待っていた、あの声だ。
彼女がグラウンドを駆ける足音が、しだいに近づいてくる。
「すみれ、こんなにびしょ濡れになって、どうしたの。風邪引いちゃうよ。」
彼女は持っていた傘で、私から雨を遮る。ポケットからハンカチを取り出し、私の制服を拭き始めた。
どうして。
彼女の方が、辛い思いをしてきたはずで、久しぶりに会った親友には、

言葉さえかけてもらえなくて。優希はあの時の私に、何を思っただろう。親友を前に、言葉の出ない私を、どう思っただろう。あの瞬間の怖さが、再び私を襲う。こんな最低な自分を、彼女は好きでいてくれるはずがないのに。

彼女を見たら、自分に対する悔しさが、惨めさが、今になって戻ってきてしまった。彼女の姿が、次第にぼやけていく。ごめん、そう言わないと、自分が自分を許せない気がした。

「ゆうき。」

俯いたまま発した声が、震えた。涙が喉の奥にたまって、上手くいかない。ちゃんと言わなきゃいけないのに。

口を開きかけた時だった。太陽の香りが、柔らかな温かさが、私を包んだ。降り止むことを知らない雨の中、彼女は私を抱きしめた。彼女の少し明るい色の髪だけが、視界の端に映った。

「なに？」

穏やかなその声に、心の中の、苦しかった部分が、ほろほろと解けてゆく。

彼女の声が、肌が、私の記憶と重なる。

入学式の日交わした、ぎこちない会話。

初めて目にした、彼女の笑顔。

初めて本を貸してくれた日。

初めて呼び捨てで呼び合った日。

本の感想で盛り上がった日。

二冊目の本を貸してくれた日。

何気ないことで笑い合った日。

今、抱きしめてくれたこと。

それから、忘れちゃいけないこと。

それは、私は彼女が大好きだということ。

ごめん、そう言おうとしていたけれど、やめた。その言葉は違う。そんな独りよがりな言葉じゃ伝わらない。自分の素直な気持ちは、彼女に伝えなきゃいけない気持ちは。

「あ、りが、、とう。」

嗚咽が混じって、上手くは言えなかった。雨と涙でぐちゃぐちゃな私に、彼女は優しく頭を撫でてくれる。

「うん、こちらこそ、ありがとう。」

ふと、自分の耳に届くのが、彼女の声だけになったことに気づく。

夕焼けを作る前の空に、虹がかかっていた。

「雨、止んだね。」

「うん。」

そう言って微笑んだ彼女が、本当は涙していたことを、私は知っている。

彼女は空を見あげるふりをして、指で目を拭っていた。

〔紙飛行機〕

その涙が意味していたことを、その時の私は何も知りませんでした。ただあの時間は、私たちにとって十分な時間で、ずっと忘れることのない時間になったというのは、当時の私にも分かりました。

長い夏休みが明け、教室に入ると、私の机の後ろに、あなたの席はありませんでした。誰にも、何も伝えぬまま、あなたは私のもとから離れて行ってしまいました。

それでも私は、不思議と寂しさを感じませんでした。あの時抱きしめてくれた時の温度や、あなたの声を、心が覚えていたからなのかもしれません。

クラスでは、いじめにあっていたとか、もともと転勤族だったとか色々な憶測が飛び交いましたが、私はどちらにせよ、あなたの夢が叶うことだけを願っていました。

あなたは覚えていますか。初めてあなたに会った日、あなたは、本が好きかと聞いた私に、こう言いました。

『大好き。新しい世界に行けるから。』

だから私は、あなたが誰にも邪魔されずに、『新しい世界』に飛び込んでいけるようにと、ただ願い続けていました。

今、あなたの太陽のような、陽だまりのようなその瞳には、何が映っていますか。『新しい世界』は、見つかりましたか。

また会えるのなら、それまでに私も、自分だけの『新しい世界』を見つけてみようと思います。

だから優希、どこかで待ってて。

じゃあ、またね。

（指導教諭／柳　沼　とも子）

《作品の意図》

不登校になってしまった優希と彼女を待ち続けるすみれが、前を向いて歩き出すまでの物語です。その中に自分の体験を少しずつ交えながら描いてみました。不登校を問題視する大人は少なくないですが、心の葛藤を抱えながらも乗り越えようとする彼女たちにとって、それは本当に「問題」なのでしょうか。

その経験が将来、彼女たちにとって意味のあるものになることを、この物語を通して、信じてほしいです。

《作品の寸評》

中学校入学の日、主人公流川すみれはそれまで顔見知り程度の同級生だった呂井優希と同じクラスになり、すぐにその人間性に魅了される。しかし、程なく優希は学校に来なくなり、やがて転校していってしまう。

不登校という重いテーマを扱いながらも、かけがえのない友だちとなった優希を太陽のような微笑と陽だまりのような瞳を持ち、本から広がる「新しい世界」に飛び立つ憧れの存在として描き、爽やかな読後感を残す作品に仕上げている。

場面構成も工夫され、【春風】【快晴】…【土砂降り】【夕虹】と、すみれの心の有り様と季節の推移を呼応させて展開し、締めくくりは澄んだ秋空に飛び立つ紙飛行機に、転校していった優希を重ね合わせた。

読者を作品に引き込む筆力があり、「見つからないよう、足を止める。その瞬間、何か思い出したように、耳に雨の音が戻った。前身を打つ雨の冷たさが、しみる。」など、リズム感のある巧みな表現が随所に見られる。

（審査員／伊　藤　幸　夫）